１０　忙しいやつら

駆逐艦が突然姿を消したということは、可能性としては二つしかない。どこかへ行ったか、撃沈されたかである。そしてこの場合、あの巨大戦艦に撃沈された可能性が極めて高い。マテウスは、これから起こり得るあらゆる事態について頭の中で想定しているが、あれこれ考える間もなく、巨大戦艦がレグルス２号に接近してきた。

レグルス２号に通信が入る。

「『こちらはメルグ共和国所属、第十三艦隊艦長、リアーナ・チャマトである。貴艦の救助要請に応じる。』だってさ。おれたち助かったかもだぜ」

ジョージが安心しきってその場にへたりこむと、キリルとゴサクが手に持っている酒のグラスをカチンと合わせて乾杯をした。死ぬ覚悟で飲んでいた酒が、一命をとりとめた祝い酒に変わったのだ。

巨大戦艦の船底の大きなハッチが開くと、誘導ビームが伸びてレグルス２号につながる。

レグルス２号はメルグ星人の巨大戦艦によって救助されることになった。

こちらの救助要請、つまりＳＯＳ信号は無駄にならなかった。

巨大戦艦の中はやはり巨大である。ちょっとしたドーム野球場の広さもあるかと思われる空間に、メルグ星の戦闘機が、その数は数百になろうかと思

さくらぷりんと®

われるが整然と並んでいる。

収容されたレグルス2号の周りに、もの珍しそうに整備士やパイロットたちが集まってきた。メルグ星人は、相変わらず背が低い。

背が低いのに、馬鹿にでかい戦艦を作るもんだとジョージが思いながらキョロキョロ眺める。

そのうちに、将校らしき者がやってきて、自動翻訳機を通して四人の乗組員に挨拶すると、そのままブリッジに案内してくれた。

四人はブリッジで、この巨大戦艦の艦長と面会することになった。

白いひげをたくわえた、ソンダイそうなじじいがマテウスたちと視線も合わさないまま言葉を放った。

「艦長のリアーナ・チャマトである。貴殿らの無事を祝福する」

（アマトリチャーナだと？）

「今何か言いました？」

小声でゴサクがジョージに聞くと、ジョージは小さく首を横に振った。

相手艦長に対しては、マテウスがきっちりと敬礼しながら答える。

「この度は、救助いただきありがとうございます」

リアーナ・チャマト艦長は、マテウスの敬礼をちらりと見た後にうむとうなずき

「貴殿らを攻撃していた艦は、地球軍のものだと思うが、なぜ味方からの攻撃を受けていたのか？」

さくらぷりんと®

と当然の疑問を口にする。

「それが、全く原因が分かりません。我々は、先日メルグ共和国と結ばれたこの星域に関する仮協定に基づき、再調査の命を受けてここまで参りました。また、先ほどの駆逐艦は、こちらが通信をかける前に攻撃してきました。［　Ａ　］、攻撃の動機も不明であり、所属する艦隊も不明です」

「なるほど、では撃沈する前に私が所属を確認すべきであったか」

リアーナ・チャマトは、無表情のまま衝撃的なことを口にした。

「げ、やっぱり撃沈しちゃったの？」

キリル、ジョージ、ゴサクの三人は改めて驚くが、リアーナ・チャマト艦長はまったく動じていない。視線は前方を見すえたまま言葉を続ける。

「貴殿らの艦は、明らかに非武装である。したがって、あの駆逐艦の行為は、宇宙協定第六条イハンとみなし、即時撃沈した。何か問題あるか？」

当然のことをしたまでと言いたげである。

「閣下の仰る通りです。我々は非武装であり、攻撃は宇宙協定第六条にイハンしております。何も問題ありません」

マテウスは冷静に、そして丁寧に返答する。

それにしても、即時に撃沈しなくてもよいのではないか。この巨大戦艦があの駆逐艦を攻撃するにしては、あまりにも戦力の差が大きすぎる。警告を発して武装解除させ、捕獲して尋問する手もあったのじゃないか。たしかに、『宇宙協定』では、イハンした艦船は、その場で殺されても文句は言えない。

さくらぷりんと®

「　B　」、イハンしたと言っても、その船に乗っている多くの乗組員は上官の命令に従っただけで、罪は『宇宙協定』に反する命令を下した責任者だけが問われるべきではないか。有無を言わさず撃沈するのはやりすぎだ。

恐らく、マテウスを含むレグルス2号の四人は同じことを思っていただろう。

しかし、

『救助してもらった立場で、撃沈に関してあれこれ言うのは失礼だ』のように常識的な考えでいたのは、もしかしてマテウスだけだったかもしれない。

ということで、あまり酔っぱらっていないキリルが巨大戦艦の艦長に向かって食ってかかった。

「うん、やっぱ許せんわ。あのさ、艦長さんよ。助けてもらってこんなこと言うのもなんだけどね。あんたやりすぎだよ。や・り・す・ぎ。あんたが殺した乗組員の中には、仕方がなく命令に従ってただけっていうのもいるわけ」

「ちょ、おい。キリルやめ……」

マテウスが止めようとするが、キリルはマテウスの口をふさいで続ける。

「リアーナ・チャマトさんだっけ？　艦長やってりゃ分かるよね。あの駆逐艦の乗組員たちにも親とか家族とかあるわけ。秒殺することないよねえ。他に方法なかったの？　あったよね、艦長さん。ねえねえ、バカなの？　死

さくらぷりんと®

ぬの？　メルグ星人の戦艦の艦長ってバカしかなれないの？　それともあんたが単独でバカなの？　あ～あ、いっぱい死んじゃったよねえ。殺したのあんただよねえ。たしかに、おれたち攻撃されてたけどさ。あいつら殺してくれなんて思ってないし。『殺してくれてありがとう、マンモスうれぴぃな（はぁと）』なんて思ってないし。どうすんのよあれ、かわいそうに。なあ、ジョージ、お前もそう思うだろ？」

ジョージは、うなずいて相手艦長の顔に視線を移す。「［　C　］」、マテウスは頭を抱えていた。

そして、このキリルの言葉は、自動翻訳機を通じてブリッジにいるメルグの乗組員たちにもしっかりと聞こえてしまっている。ブリッジの空気はすでに凍り付いていた。その場にいるメルグの乗組員たちは、互いに顔を見合わせながら、気まずい雰囲気をかもし出している。

リアーナ・チャマト艦長は、顔をコウチョウさせてぷるぷる震えている。

「レ・カーゼプ！」

と鋭い声ですぐ側にいた副官を呼んでこう言った。

「見ての通り、この者たちは私に敵意を向けた。艦長である私への敵意は、わが軍への敵意とみなす。よって、この四名を制圧し、今後は捕虜として扱う。確保しろ」

この艦長の一声によって、マテウスたちはあっという間に銃を構えたメルグ星人の兵士達に取り囲まれた。

さくらぷりんと®

キリルは、

「敵意？　やっぱりバカだったか」

と吐き捨てたあと、マテウスに頭をはたかれていた。

そのまま四人は、戦艦の中の殺風景なひと部屋に連行され、外から鍵をかけられた。どうやらしばらくはこの部屋に監禁されることになったようだ。

先ほどは、味方の駆逐艦に攻撃されて命拾いをしたと思ったら、数時間後にはメルグ星人の戦艦の中で捕虜となってしまった。いやはや忙しいやつらである。

さくらぷりんと®

――　南無阿弥陀仏

捕虜とは、捕らえた敵の軍人のことである。宇宙協定において、捕虜の扱いは人権保護の観点から細かく定められており、虐待禁止はもちろんのこと、最低限度の衣食住が確保されなければならない。

生まれて初めて捕虜という立場を味わうレグルス2号の四人は、一体どんな扱いを受けるのかと心配していたが、部屋がやや狭いことを除けば、他は大体において普通であった。食事も出るし、望めば酒も出る。

監禁部屋に入れられてから、マテウスはずっとむっつり顔で無口をつらぬいている。駆逐艦を撃沈したことについて、あの場で何も言わずに黙っていれば何事もなかったのに、キリルが余計なことを言ったばかりに、四人全員が捕虜となってしまった。まさに『（　D　）』のお手本のような有り様である。しかし、マテウスがこの件に関して無言をつらぬく理由は三つある。

第一に、キリルのことだ。キリルは、マテウスの言いたいことは大体わかっているだろうが、一ミリも反省することはないだろう。あの場面で艦長に食ってかかったことをたしなめても、どうせ「おれは間違ったことは言ってない」と言い張るにちがいない。

第二に、ジョージのことだ。ジョージは、キリルが言わなければ自分がビシッと言ってやろうと思っていたに決まっている。むしろ、キリルに先を越

さくらぷりんと®

されたことを後悔しているくらいだろう。だからジョージは、この件についてはキリルの味方である。つまり、この件で言い合いを始めたら、数の問題だけならば二対一でマテウスの負けになる。

第三に、マテウス自身についてだ。たしかに、捕虜になってしまったことに腹は立つが、マテウスだって内心ではキリルの意見には賛成だ。キリルは正しい。間違ってはいない。キリルの意見に心のどこかで賛同している自分がいる限り、キリルを徹底的に責めることはできないと自覚している。

以上の三点により、マテウスはこの件については黙っていることにしたのだ。

しかし、腹は立つ。これはしょうがないことである。

何に腹が立つのか。

まず、相手の艦長に腹が立つ。ちょっとこちらが駆逐艦の即時撃沈を批判したからと言って、それを「わが軍への敵意と見なす」なんて言って、いきなり捕虜はないだろう。こんな大きな戦艦の艦長をやっていて、「批判」と「敵意」の区別もつかないのならあきれるばかりだ。しかし、あの艦長だって本当はそんなことは分かっているだろう。生意気な地球人に対する仕返しとして、我々を捕虜にしたのに決まっている。元々、例の駆逐艦が宇宙協定にイハンしていると見るやいなや、即刻撃沈することをためらわないような人物である。気分を害する虫けらどもを捕虜にして、艦長の自分に向かってたてついたことを後悔させてやろうという内心が、マテウスには手に取

さくらぷりんと®

るように分かる。要するに、リアーナ・チャマト艦長は、いけ好かないサイコパス野郎なのだ。

そしてマテウスの腹立ちポイントその二は、キリルである。いくらキリルの意見が正論であると言っても、相手はこちらを救助してくれて、しかも初対面の、異星人の艦長である。そんな相手に、いきなり食ってかかるキリルはぶっ飛んでいるという他ない。正しいからと言って、時と場合をわきまえずにそれを主張し続けることは、時に自分の立場を危うくすることは明らかだ。それともキリルは、あまりにも頭が良すぎるので、頭の中のネジが何本か抜けているのだろうか。言いたいことも言えないくらいなら、死んだ方がましだと思っているのだろうか。キリル自身がそういう信条に従うのは結構だが、巻きぞえをくらうこちらの身にもなってほしいものである。

そんな風にもんもんと考えを繰り広げるマテウスの横で、ゴサクが何やら手を合わせながらブツブツとつぶやいており、それをもの珍しそうにジョージとキリルが眺めていた。

「おい、ゴサク。さっきから何をやってる？」

不思議そうにジョージが聞く。

「ああ、死者がたくさん出たので、成仏できるようにお経をあげています」

「ジョーブツ？」

「オキョー？」

さくらぷりんと®

ジョージとキリルは不意打ちをくらったゴリラのような顔になった。

「人が死んだら、魂が残りますよね。その魂がちゃんとあの世へ行って、こちらに残らないように、お経を読んであげます」

「魂が残る？」

「まさか！」

信じられない様子のジョージとキリルである。だが、監禁部屋での退屈しのぎには面白そうな話題だ。

「じゃあ、魂があるとして、そいつがあの世に行ったらどうなるんだ？」

「そりゃ天国か地獄に行きますよ。ジョージさん、何にも知らないんですね」

「まてまてまて……おれは、神を信じたら天国へ行けるという話は聞いたことがあるが、魂っていうのはなあ」

「おれもジョージと同じだ。そいつはなんていう宗教だい？」

ジョージもキリルも信仰する宗教を持っているわけではないが、相手の宗教観を知ることは、相手の行動原理を知ることにもつながる。聞いておいて損はない。

「お経は仏教ですよ。シュウハによっていろいろな種類のお経があるみたいですが、自分が知っているのはこれです」

「じゃあ、ゴサクは仏教を信仰しているんだな」

「いいえ、別に……」

即答するゴサクに、ジョージもキリルも大混乱である。信仰していない宗

さくらぷりんと®

教の経典を唱えるとは何事か。イスラム教を信仰していないのに、コーランを唱えるようなものではないか。キリスト教を信仰していないのにアーメンと祈りを捧げるようなものではないか。

「信仰してないのに、お経を読むの？」

「自分の信仰なんて関係ないですよ。死んだ人のために、お経を上げているだけですから」

ゴサクの言葉を受けて、キリルが論点をまとめる。

「ええと、つまり、ゴサクは仏教を信仰してはいないけど、あの駆逐艦の死者たちをとむらうためにお経を唱えている。しかも、そのお経をとなえると、死者の魂があの世に行けるということだな」

「さすがキリルさん。そういうことです。しかし、自分がお経をとなえたからといって、死者の魂があの世に行くかどうかは、本人次第のようです」

「なるほど。しかし、魂があるとしても、こんな辺ぴな宇宙の片隅に、好んで残るような奴はいないだろう。みんなあの世に行ってくれるさ」

「それもそうですね。それならば、お経のあげがいがあるというものです。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ……」

「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ……」

いつの間にか、ジョージとキリルも一緒になってお経をあげていた。

さくらぷりんと®

12　メルグ星のマルゲリータ

メルグの戦艦は、四人を捕虜にした数日後にメルグ星に到着した。

到着後、レグルス2号の四人は、軍の宿舎のようなところへ連れて行かれ、そこにしばらくいるように命じられた。

捕虜という立場は解かれていないため、勝手に出かけたり、通信したりすることは禁止されている。代わりに食べること飲むことは自由だった。料理もできる。

監視役として、カート・レペスという無口な男がついた。

（ペスカトーレかよ）

と思ったジョージに、

「今、何か言いました？」

とゴサクが聞いたが、ジョージはいや別にと口ごもる。

そのジョージだが、さっそくカートに頼み事をしていた。

「あのね、カートさん。小麦粉って分かる？　白い粉だよ、料理に使うんだ。そうそう。それとね、チーズって分かる？　ミルクを固めた食べ物で、熱を加えるとトロトロするの。あと、バジル……は無いかな」

ようするに、ジョージはピザの材料がほしいのだ。

カートがあちこち走り回って材料をそろえてくれた。星はちがっていても、

さくらぷりんと®

似たような食材はあるらしい。

材料がそろうとジョージは早速にピザ作りにとりかかるのだが、台所の調理器具が地球のものとは勝手が違う。ジョージは、カートをつかまえて調理器具の使い方をあれこれ教わっていた。

おいしいピザを焼くには、温度が決め手となる。本来ならば高温の石窯（いしがま）でさっと焼くのが理想である。ジョージは、なんとかそれに似た火加減を再現するために、カートを質問攻めにしていた。

地球とメルグ星では、温度の単位が違う。理想の温度をなんとか伝えるために、ジョージはあれこれ表現を工夫していたが、結局一番よく伝わったのは、

「水が沸騰（ふっとう）する温度の四・八倍」

という表現だった。

幸い、メルグ星人も食べることは嫌いではないようで、ジョージが熱心にピザについての豆知識を語ると、カートもふむふむと興味深げに聞いているのがはた目に見るとなんとも言えずおかしな光景だった。

「その昔、地球という星にはイタリアって国があってだな。ピザはその国の伝統料理だったんだ。ええと、今から約四千年前よりちょい前に、イタリアのナポリという場所で、『真のナポリピッツァ協会』というのが創設（そうせつ）されて。そこでピザの理想の焼き加減が決められたんだ。おれは、真のナポリピザを極めるために、その焼き加減に合うように、レグルスのオーブン

さくらぷりんと®

を調整してあるんだが、まあ、あれだね、ここのオーブンでうまく焼けるかどうかは、やってみないと分からない。とにかく、細かい温度設定と、秒単位での焼き時間の管理が重要だ。レグルスのオーブンだと、約七十秒で焼き上がりなんだがね。表面が少しこげて、パリッとして、それでいて中はふんわり。目玉が二倍の大きさになるくらいうまいんだぜ……」

と、ジョージのピザ談義を全て紹介していると紙が何枚あっても足りないのでこの辺にしておくが、その話をうなずきながらずっと聞いているカートという青年は、うなずきすぎて首がもげるんじゃないかというぐらいジョージの話を聞き続けていた。

語りながらピザ生地をこねていたジョージは、やがてオーブンの温度調整をする。ピザにソースとチーズをトッピングし、焼きの工程に入る。ここからはあっという間である。約一分でピザは焼き上がる。とてもおいしそうな、よい香りが部屋の中に充満する。

ジョージは、手早くピールをあやつり、オーブンの中のピザを皿にのせると、熱々のうちにナイフで切り分けた。ピザカッターが無いのが残念だが、そうそうぜいたくばかりも言ってられない。

「おお、うまく焼けたね。こんなところまで来て、ピザ焼きとはさすがジョージだ」

ピザの焼き上がりに合わせてキリルが近づいて来た。

「こんなところだからこそ、ピザを焼くんだ。他にやることないんだもん。

さくらぷりんと®

ところで、このピザはお客さん用だ。キリルのはこれから焼いてやるよ」

ジョージはそう言うと、カートの前に皿を置き、

「食べてみなよ」

とすすめる。

すすめられたカートは、一瞬たじろいだ。カートは、四人の監視役（かんしやく）としてここにいるのであって、ピザをごちそうになるためにいるわけではない。

カートの内心の戸惑（とまど）いを察知したのか、ジョージが声をかける。

「カートさん、難しいことは食ってから考えなよ。せっかくの焼きたてが冷めちまう。この一枚はカートさんのおかげで焼けたようなもんだ」

説得に押されたカートは、一切れ手にとって、おそるおそる口に運んだ。

焼きたてをほおばったカートは、ピザを口にしたまま目を見開いてジョージの顔を見る。

（なんだ、このうまい食い物は？）

と目が語っている。

「ほら、うめぇだろう。目玉が二倍になりやがった。腹一杯になるまで、どんどんやってくれよな」

ジョージは鬼の首を取ったように笑う。そして、カートがピザを平らげるのを見つめていた。カートは無言で一枚食べきった後に、やっと感想を言った。

「これはなんとも……おいしいものですな。自分はピザというものは初め

さくらぷりんと®

て食べましたが、おそろしくおいしい。おいしすぎて脳みそがとろけるか
と思いました。おかわり、いただけますか」
「もちろんさ」
ジョージのピザは、宇宙を平和にするのであった。